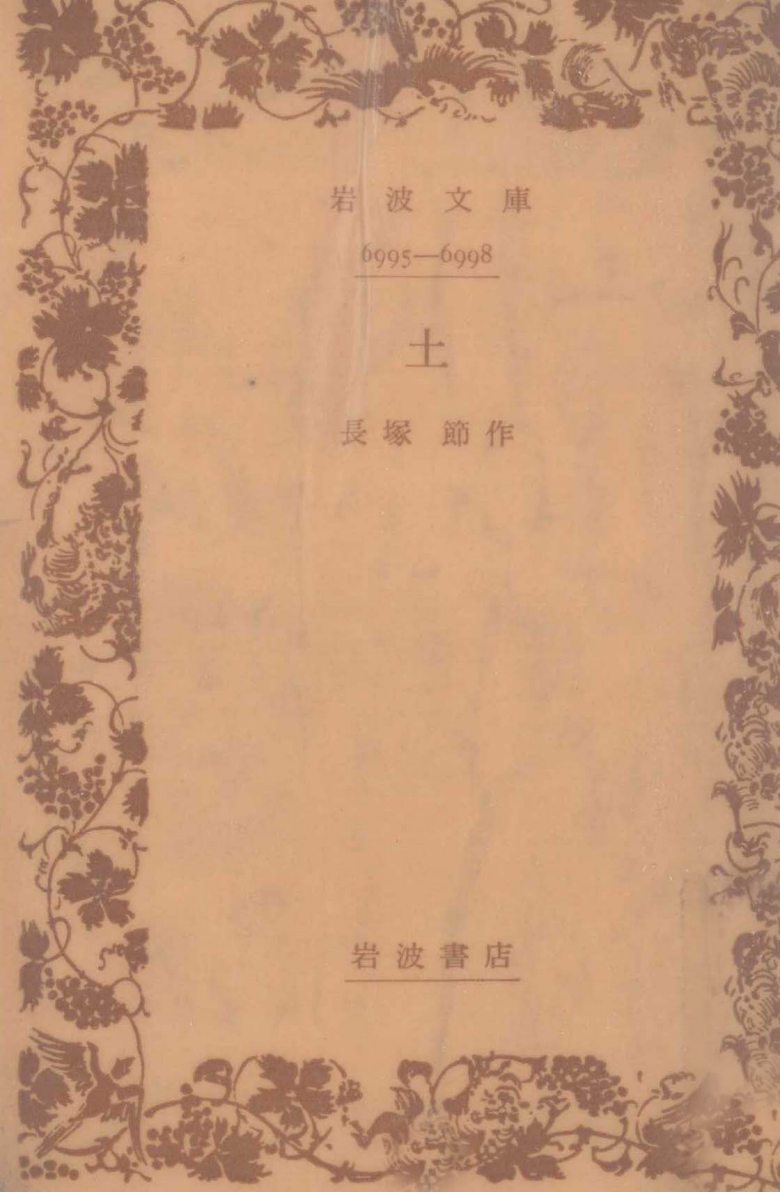




岩波文庫

6995—6998

土

長塚節作

岩波書店

「岩波文庫発刊の目的は、各冊の巻末に付されている「読書子に寄す」の中に明確にされております。その方針のもとに書目の厳選と校訂の厳密を特色として古典の普及に努力してまいりました。しかし、戦後、表記法の変遷によって、若い読者の中には、旧字体、旧かなづかいを不便とされる方々が圧倒的に多数となり、旧態のままでは、残念ながら古典の普及という目的の達成が困難となりました。よって専門家の御意見を伺い、慎重に審議いたしました結果、一部のものについては、各専門家の御指導のもとに、原作者あるいは著作権者の御了解を得、現代表記を採用することにいたしました。この本はその方法によったものでございます。——岩波書店編集部」

昭和四五年六月一六日 第一刷発行 ©

土

定価★★★★★

作 者 長 なが 塚 つか 節 たかし

発 行 者 岩 波 雄 二 郎

発 行 所 東京都千代田区 株式 会社 岩 波 書 店  
一ツ橋三ノ五ノ五

落丁本・乱丁本はお取替いたします

精興社印刷・桂川製本

岩 波 文 庫

6995—6998

土

長 塚 節 作



## 目次

|                    |    |
|--------------------|----|
| 『土』について(夏目漱石)..... | 五  |
| 土.....             | 一三 |
| 解説(小田切秀雄).....     | 三九 |



## 『土』について

夏目漱石

「土」が「東京朝日」に連載されたのは一昨年の事である。そうしてその責任者は余であつた。ところが不幸にも余は「土」の完結を見ないうちに病氣にかかつて、新聞を手にする自由を失つた。また「土」の作者を思い出す機会をもたなかった。

当初五六十回の予定であつた「土」は、同時に意外の長編として発達していった。途中で話の緒口を忘れた余は、再びそれを取り上げて、やたらな区切りから改めて読み出す勇氣を鼓舞しにくかつたので、ついそれなりに打ちやつたようなものの、腹のなかではひそかに作者の根氣と精力に驚いていた。「土」はなんでも百五六十回に至つてようやく結末に達したのである。

冷淡な世間と多忙な余はその後久しく「土」の事を忘れていた。ところがある時このあいだなくなつた池辺君に會つて偶然話頭が小説に及んだおり、池辺君はなぜ「土」は出版にならないのだらうと言つて、だいぶ長塚君の作をはめていた。池辺君はその当時「朝日」の主筆だったので「土」は始めからしまいまで目を通したのである。その上池辺君は自分で文学を知らないと言いつながら、その実摯實な批評眼をもつて「土」を根氣よく読み通したのである。余は出版界の不景

氣のために「土」の単行本が出る時機がまだ来ないのだろうと答えておいた。その時心のうちでは、ずいぶん「土」に比べるとつまらないものも公にされる今日だから、できるならいつか書物にまとめておいたら作者のためによからうと思ったが、不親切な余はその日が過ぎると、また「土」の事をまるで忘れてしまった。

するとこの春になって長塚君が突然尋ねて来て、ようやく本屋が「土」を引き受ける事になったから、序を書いてくれまいかという依頼である。余はその時自分の小説を毎日一回ずつ書いていたので、「土」を読み返す暇がなかった。やむを得ず自分の仕事が済むまで待つてくれと答えた。すると長塚君は池辺君の序もほしいからついでに紹介してもらいたいと言うので、余はすぐ承知した。余の名刺を持って「土」の作者が池辺君の玄関に立ったのは、池辺君の母堂が死んでちょうど三十五日に相当する日とかで、長塚君はただ立ちながら用事だけを頼んで帰ったそうであるが、それから三日して肝心の池辺君も突然なくなってしまったから、同君の序はどうとう手に入らなかったのである。

余は「彼岸過ぎまで」を片付けるや否や前約を踏んで「土」の校正刷りを読み出した。思ったよりも長編なので、前後半日と中一日を丸つぶしにしてようやく業をおえて考えてみると、なかなか骨の折れた作物である。余は元来が安価な人間であるから、たいいていの人のものを見ると、すぐ感心したがる癖があるが、この「土」においても全くそうであった。まず何よりも先に、これは到底余に書けるものではないと思った。次に今の文壇で長塚君を除いたらだれが書けるだろう

と物色してみた。するとやはりだれにも書けそうにないという結論に達した。

もっともだれにも書けないというのは、文をやる技倆ぎりやうの点や、人間を活躍させる天賦の力をさすのではない。もしそれだけの意味でだれも長塚君に及ばないというなら、一方では他の作家を侮辱した言葉にもなり、また一方では長塚君をかつぎ過ぎる策略とも取れて、どちらにしても作者の迷惑になるばかりである。余のだれも及ばないというのは、作物中に書いてある事件なり天然なりが、まだ長塚君以外の人の研究に上っていないという意味なのである。

「土」の中に出て来る人物は、最も貧しい百姓である。教育もなければ品格もなければ、ただ土の上に生み付けられて、土とともに生長した蛆むし同様に哀れな百姓の生活である。先祖以来茨城いばらきの結城郡に居を移した地方の豪族として、多数の小作人を使用する長塚君は、彼らの獸類に近き、恐るべく困憊こんぱいをきわめた生活状態を、一から十まで誠実にこの「土」の中に収め尽くしたのである。彼らの下卑で、浅薄で、迷信が強く、無邪気で、狡猾うさかで、無欲で、強欲で、ほとんど余ら（今の文壇の作家をことごとく含む）の想像にさえ上りがたい所を、ありありと目に映るように描写したのが「土」である。そうして「土」は長塚君以外に何人なんびとも手を着けられ得ない、苦しい百姓生活の、最も獸類に接近した部分を、精細に直叙したものであるから、だれも及ばないというのである。

人事を離れた天然についても、前同様の批評をいかな読者も容易にうけがわなければ済まぬほど、作者は鬼怒川沿岸の景色や、空や、春や、秋や、雪や風を綿密に研究している。畑のもの、

畔に立つ櫟の木、蛙の声、鳥の音、いやしくも彼の郷土に存在する自然なら、一点一面の微に至るまでことごとくその地方の特色を備えて叙述の筆に上っている。だからどこにどう出て来ても必ず独特である。その独特な点を、普通の作家の手に成った自然の描写の平凡なものに比べて、余はだれも及ばないというのである。余は彼の独特なのに敬服しながら、そのあまりに精細すぎて、話の筋を往々にして殺してしまう失敗を嘆じたくらい、彼は精緻な自然の観察者である。

作としての「土」は、むしろ苦しい読みものである。決しておもしろいから読めとは言いにく

い。第一に作中の人物の使う言葉が余らにはあまり縁の遠い方言から成り立っている。第二に結構が大きいわりに、年代が前後数年にわたるわりに、周囲に平たく発達したがる話が、筋をくつきりと描いて深くなりつつ前へ進んで行かない。だから全体として読者に加速度の興味を与えない。だから事件が錯綜纏綿してもつれながら読者をぐいぐい引き込んで行くよりも、その地方の年中行事を怠りなく丹念に平叙して行くうちに、作者のこしらえた人物が断続的に活躍すると言ったほうが適當になって来る。そこにいささか人を魅する牽引力を失う恐れが潜んでいるという意味でも読みづらい。しかしこれらは単に皮相の意味において読みづらいので、余のいわゆる読みづらいという本意は、編中の人物の心なに行かないが、ただ圧迫と不安と苦痛を読者に与えるだけで、毫も神の作ってくれた幸福な人間であるという刺激と安慰を与え得ないからである。悲劇は恐ろしいに違いない。けれども普通の悲劇のうちには悲しい以外に何かの償いがあるので、読者は涙の犠牲を喜ぶのである。が、「土」に至っては涙さえ出されない苦しさである。雨の降

らない代わりに生涯<sup>しょうがい</sup>照りつこない天気と同じ苦痛である。ただ土の下へ心が沈むだけで、人情から言っても道義心から言っても、ほとんどこの圧迫の賠償として何物も与えられていない。ただ土を掘り下げて暗い中へ落ちて行くだけである。

「土」を読むものは、きっと自分も泥の中を引きずられるような気がするだろう。余もそういう感じがした。ある者はなぜ長塚君はこんな読みづらいものを書いたのだと疑うかもしれない。そんな人に対して余はただ一言、こんな生活をしている人間が、我々と同時代に、しかも帝都を去るほど遠からぬ田舎<sup>いなか</sup>に住んでいるという悲惨な事実を、ひとと一度は胸の底に抱き締めてみたら、きみたちのこれから先の人生観の上に、またきみたちの日常の行動の上に、何かの参考として利益を与えはしまいかと聞きたい。余はとくに歓楽に憧憬<sup>どうけい</sup>する若い男や若い女が、読み苦しいのをがまんして、この「土」を読む勇気を鼓舞する事を希望するのである。余の娘が年ごろになつて、音楽会がどうだの、帝国座がどうだのと言ひ募る時分になつたら、余はぜひこの「土」を読ましたいと思つてゐる。娘はきつといやだというに違ひない。より多くの興味を感じる恋愛小説と取り換えてくれというに違ひない。けれども余はその時娘に向かつて、おもしろいから読めというのではない。苦しから読めというのだと告げたいと思つてゐる。参考のためだから、世間を知るためだから、知つておのれの人格の上に暗い恐ろしい影を反射させるためだからがまんして読めと忠告したいと思つてゐる。何も考えずに暖かく生長した若い女(男でも同じである)の起こす菩提心<sup>ぼだいしん</sup>や宗教心は、皆この暗い影の奥からさして来るのだと余は固く信じてゐるからである。

長塚君の書き方はどこまでも沈着である。その人物は皆ありのままである。話の筋は全く自然である。余が「土」を「朝日」に載せ始めた時、北のほうのSという人がわざわざ書を余のもとに寄せて、長塚君が旅行して彼と面会したおりの議論を報じた事がある。長塚君は余の「朝日」に書いた「満韓まんかんところどころ」というものをSの所で一回読んで、漱石という男は人をばかにしているといつて大いに憤慨したそうである。漱石に限らずいたい「朝日新聞」の記者の書きぶりは皆人をばかにしていると言つてののしつたそうである。なるほどまじめに老成した、ほとんど嚴肅という文字をもつて形容してしかるべき「土」を書いた、長塚君としてはもっともの事である。「満韓ところどころ」などが君の気色を害したのはさもあるべきだと思ふ。しかし君から輕けい佻ちようの疑いを受けた余にも、まじめな「土」を読む眼はあるのである。だからこの序を書くのである。長塚君はたまたま「満韓ところどころ」の一回を見て余の浮薄を憤つたのだろうが、同じ余の手になったほかのものに偶然目を触れたら、あるいは反対の感を起こすかもしれない。もし余が徹頭徹尾「満韓ところどころ」のうちで、長塚君の氣に入らない一回をもつて終始するならば、到底長塚君の「土」のためにこれほど言辞を費やす事はできない理屈だからである。

長塚君は不幸にして喉頭結核こうとうけつかくにかかつて、このあいだまで東京で入院生活をしていたが、今は養生かたがた旅行の途にある。せんだつてかねて紹介しておいた福岡大学ふくおかの久保博士くぼからの來書に、長塚君が診察を依頼に見えたとあるから、今ごろは九州にいるだろう。余は出版の時機に遅れないで、病中の君のために、「土」についてこれだけの事を言い得たのを喜ぶのである。余がか

つて「土」を「朝日」に載せ出した時、ある文士が、我々は「土」などを読む義務はないと言ったと、わざわざ余に報知して来たものがあつた。その時余はこの文士はなんのために罪もない「土」の作家を侮辱するのだらうと思つて苦々しい不愉快を感じた。理屈から言つて、読まねばならない義務のある小説というものは、その小説の校正者か、内務省の検閲官以外にそうあるはずがない。わざわざ断わらんでもないやならいやで黙つて読まずにいればそれまでである。もしまた名の知れない人の書いたものだから読む義務はないと言うなら、その人はただ名前だけで小説を読む、内容などには頓着<sup>とんじやく</sup>しない、門外漢と一般である。文士ならば同業の人に対して、たとい無名氏にせよ、今少しの同情と尊敬があつてしかるべきだと思ふ。余は「土」の作者が病氣だから、この場合にはなおさらそう言いたいのである。

明治四十五年五月



±



はげしい西風が目に見えぬ大きな塊をぐうっと打ちつけてはまたぐうっと打ちつけて皆やせこけた落葉木の林を一日いじめ通した。木の枝は時々ひゅうひゅうと悲痛の響きを立てて泣いた。短い冬の日はもう落ちかけて黄色な光を放射しつづまたいた。そうして西風はどうかするとばったりやんでしまったかと思うほど静かになった。泥をちぎって投げたような雲が不規則に林の上にじっとひっついていて空はまだ騒がしいことを示している。それで時々は思い出したように、木の枝がざわざわと鳴る。世間がにわかになんぼそくなった。

お品はまた天秤をおろした。お品は竹の短い天秤の先へ木の枝でこしらえた小さな鍵の手をぶらさげてそれで手桶の柄を引っ掛けていた。お品は百姓のすきまには村から豆腐を仕入れて出ては二三か村を歩いて来るのが例である。手桶で持ち出すだけのことから資本もいらぬ代わりにはもうけも薄いのであるが、それでも百姓ばかりしているよりも日ごとに目に見えたこづかい銭が取れるのもうしばらくそうしていた。手桶一さげの豆腐ではいつもの所をぐるりと回ればきつとなくなった。帰りには豆腐のこわれでいくらか白くなった水を捨てて天秤は軽くなるのである。お品はいつでも日のあるうちに夜なべに縄になう藁へ水を掛けておいたり、落ち葉をさらってみたりそこらこらと手を動かすことをやめなかった。天性が丈夫なのでお品は仕事を苦し